僕のペットが擬人化したら。。。。

淡緑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のペットが擬人化したら。。。。

【Nコード】

N2298Z

【作者名】

淡緑

【あらすじ】

あらすじ

兎のうーちゃんを溺愛する少年^{なと}那兎。

彼はある日、父親の書斎で偶然見つけた“擬人化のすゝめ”の本に書かれた事をうーちゃんに実践すると…

とある町に佇む一軒家に制服を着た少年が微笑みながら玄関の扉を開け入る。

少年は前髪で目が隠れており、傍から見れば少し近寄り難い雰囲気
を醸し出していた。

彼の名前は兔耳山那兔とみやまなこ 町内のごく平凡な高校に通う高校2年生
の男の子で、異常な程ペットを溺愛している以外は何処にでもいそ
うな学生である。

那兔は靴を脱いできちんと揃えてから家に行くと、目の前に真っ
白な兔を抱いた少女が立っていた。

彼女は那兔の1歳年下の妹の兔羽とわ 那兔と同じ高校に通う高校1
年生の女の子で、背中まで伸びた黒髪が似合う可憐な美少女である。
だが那兔はその姿 いや、正確に言うなら兔羽が兔を抱いている
姿を見た途端に不機嫌な顔を浮かべた。

「何勝手にモフってるんだよ？うーちゃんを好きにモフって良いの
は僕だけだぞ！？」

「だってモフモフしてて温かいんだもん それにうーちゃんが『寂
しい、死にたい…』って言ってたから放つとく訳にもいけなかつた
し。」

そう、兔耳山家には一匹の兔が飼われている。

名前はうーちゃん 那兔が偶然立ち寄ったペットショップで一目
惚れし、両親の反対を押し切って去年から飼いはじめた。

兔耳山家にやって来た頃は家族に煙たがられていたうーちゃんも今
では毎日の様に家族で取り合う争奪戦が繰り広げられている。

因みに雌で名前の由来は兔のイントネーションを訛らせただけであ

る。

「はいはい、兎の声なんて聞こえる訳ないから。さ、うーちゃんをこっちに渡すんだ。」

「もーお兄ちゃんのケチー！」

「ケチで結構ですよ。僕はうーちゃんと一緒にいられば誰に嫌われたって構わないし。」

半ば強引に兎羽からうーちゃんを奪還した那兎は階段を上り、自分の部屋へと引き籠った。

那兎がうーちゃんを抱き抱えたままベッドに寝転がると、次第にうーちゃんは彼の胸の中ですやすやと眠り初めてしまふ。

流石に無理矢理起こしては可哀想だと思った那兎はゆっくりとうーちゃんを降ろしてベッドに寝かせる。

遊び相手がいなくなり暇を持て余し出した那兎は、退屈凌ぎに父親の書斎にある難しそうな本でも読み漁りに行く事にした。

彼は一週間程前から退屈になると時々父親の書斎にこっそり忍び込んで宝探し気分で色々物色している。

と、言うのも二週間前に彼の父親が転勤で旅立ち長期の不在となったお陰で書斎に容易に忍び込めるようになったからである。

書斎の本棚には図鑑や英文で書かれた本等様々な物があり、那兎はその中から適当に一冊取って開いてみるがページに専門的用語ばかりが羅列された本だったので読むのを諦める。

ふと彼が本棚の下に目をやると、明らかに他の本とは違う随分と古ぼけた真黒な本を見つける。

彼はその本を手にとると霞んだ文字で“擬人化のすゝめ”と書かれ、開けられないよう鎖で固く縛られていた。

“擬人化のすゝめ”と書かれたその本に興味を持った那兎は自分の部屋に持ち帰り、机の引き出しからペンチを取り出し本を縛っている鎖を断ち切ろうとした。

だが鎖は堅城の如く鉄壁で全く千切れない。

思い通りにならず憤慨した那兎は本を思い切り床に叩き付け、不機嫌な顔でベッドに寝転がった。

すると本は次第に浮遊し、眩い光と共に鎖が解き放たれた。

余りにも不可思議な光景に那兎は口を開けたまま呆然としており、本は独りでに彼の手元に舞い降りページを開く。

何故かそのページのみ他のページと違い緑色でほんのりと甘い匂いが漂って来る。

「何々…このページを細かく刻んであなたのペットに食べさせれば人の姿に変える事が出来ます…？」

摩訶不思議な文章に那兎は思わず首を傾げて朗読した。

那兎は半信半疑ながらも記述されていた通りページを細かく刻み、眠っているうーちゃんの背中を申し訳無く思いながら擦って起こす。首をぶるつと振るわせて目覚めたうーちゃんを那兎はよしよしと頭を撫で、餌に細かく刻んだページを混ぜ手の平に乗せて食べさせる。うーちゃんは餌を食べ終わっても尚、那兎の手の平をぺるぺると舐めていた。

もしかするとうーちゃんにとってはあのページが余程美味しかったのでもつと食べたかったのかも知れない。

「うーちゃん、擦りたいよ…？…ってあれ？何も変わらないなあ。

まあ当たり前だよ…もし本当に人になっちゃったら大変だし…」

それから数時間後、晩御飯を食べて部屋に戻っても風呂から上がり部屋に戻ってもやはりうーちゃんに何の変化も現れない。

諦めて那兎は部屋の明かりを消し、うーちゃんと一緒に布団の中へ潜り就寝した。

翌日、カーテンから差し込む朝日に照らされ普段より早めに目覚めた那兎は何か柔らかい物に顔面を圧迫され息苦しさを感じた。

嫌な予感がした那兎は恐る恐る正体を確認すると、何と綺麗な白髪から長い耳を生やした白い肌の少女が全裸ですやすやと眠っている。その美しい姿を見た那兎は自分の目を疑い、近所迷惑な声で叫ぶ。

「うわあああああああ！だ、だだだ誰だよっ！君はっ!？」

「…?」

少女是那兎の叫び声で目を覚まし、驚いた顔で自分の手足を動かす。そう、この少女こそ“擬人化のすゝめ”の本によって擬人化したうーちゃんである。

2人は驚いて互いを見つめ合っていると、ご機嫌斜めの兎羽が目をごしごし擦りながら部屋の扉を開けて入って来た。

兎羽は鬼の形相をして右手に大きなフライパンを握っている。

「もーお兄ちゃん朝からうるさ　！お…お兄ちゃんの変態！お母さん〜！お兄ちゃんがっ！お兄ちゃんの変態になっちゃったあああ　あ！」

「兎羽！？誤解だ！これはその…お兄ちゃんの友達…友達だよ!？」

「や、やっぱり変態だあっ！お母さん〜早く来てえええええ!」

結局那兔は妹の誤解を解く事は叶わず緊急で家族会議が開かれた。並び座る兔羽と母親は那兔を蔑む様な目で睨み、室内には殺気が満ち溢れている。

因みに母親の名前は瘻兔^{いと}。とても2人の子供を産んだとは思えない程外見が若く、見た目だけなら20代前半ぐらいだろうか。

一方で那兔は畏縮して俯き溜め息を吐き、横目でちらちらと隣に座るうーちゃんを見ていた。

勿論全裸では目のやり場に困るので彼女には兔羽の服を着せてある。彼女は陰悪なムードに包まれている兔耳山家の面々を余所にきよろきよろと物珍しそうに辺りを観察し目を輝かせている。

いつまで経っても白状しない那兔に痺れを切らした兔羽は持っている包丁を彼の首元に向け、につこりと微笑んだ。

追い詰められた那兔は大人しく白状せざるを得なくなり、震えた声で語り始める。

「はあ…信じて貰えないと思うけどさ、昨日変な本を使ったらうーちゃんが朝には人間の姿に変わっちゃってたんだよ…僕も最初は誰か分からなかったんだけどね…」

「お兄ちゃんつたら見え見えの嘘付いて！正直に彼女つて言えばいいでしょ！？もうお母さんも黙ってないで何か言つてよ〜！」

「…え？ええ…でも頭から耳生えてるし…多分嘘じゃないわ…」

瘻兔は青褪めた顔でうーちゃんを見つめながら呟いた。

しかし兔羽はどんなに説明しても那兔の話を全く信じようとはせず、遂には泣き崩れてしまう。

何かうーちゃんだと証明出来る物は無いかと那兔は知恵を絞り思考している。ふとあの本が頭に浮かぶ。

那兔は2人に少し待つように言い、自分の部屋から“擬人化のすゝめ”の本を持って来て堂々と那兔の前に差し出した。

那兔は徐にその本のページをぺらぺらと捲り一通り目を通すと、凍り付いた様に動かなくなった。

那兔が彼女の顔の前で手を振ったり面白い顔をしたりしても無反応。けれども微かな声だけは僅かながらに聞こえて来る。

「これって…」

「？何だよ、はっきり言つてよ。」

「こんなの読める訳無いでしょお兄ちゃん！一体何処の国の文字なの！？」

「どれどれちよつと見せて…ってちゃんと日本語で書かれてるじゃないか。もー嘘付くなよー。」

「もう良い！お兄ちゃんなんてお兄ちゃんじゃない！変態…そう、これからは変態って呼んでやる！」

確かに那兔が本を読んだ時には象形文字に酷似した文字が記述されていたのだが、那兔が読む時にはしっかりと日本語で記述されている。恐らく所有者以外には解読出来ない仕組みにされているのだろう。この事が原因で結局2人の間に溝が出来たまま家族会議は終了し、那兔是那兔が話しかけても口を聞いてくれなくなった。

飯に言葉を発したとしても聞こえて来る言葉は必ず一言“変態”だけだった。

不幸中の幸いか、猿兎だけは那兎の話を利用してくれたのでうーちやんは何とか兎耳山家から追い出されずに済んだ。

とは言え急に子供が1人家族に加わるとなれば、今後色々な課題をクリアしなければならぬ。

家族会議終了後、那兎はうーちゃんを自分の部屋に招き入れ言葉を話せるかどうか試す。

だがやはりと言うべきか彼女は一言も喋らず潤んだ瞳で那兎に擦り寄るだけだった。

尤も普段美少女と縁が無い那兎にしてみれば言葉等無くても十分過ぎる程幸せで、人間になったうーちゃんに対して俗に言う一目惚れをしてしまっていた。

「えへへ…モフれなくなったのは残念だけどこれはこれで良いね。」

「…」

「那兎、朝ご飯出来たよ」

「うん、今行くよー」

猿兎に呼ばれた那兎はうーちゃんの手を引いて1階のリビングへ移動し席に着いた。

今日は家族会議が行われた所為で少し遅めの朝食である。

卓上にはごはん・味噌汁・納豆・焼き魚等々の和食が並び、うーちやんは初めて食べる人間の食事に興味津津の様子で長い耳をぴくぴくさせている。

流石に元は兎でも体は人間なのだから牧草を食べさせる訳にもいか

ないだろう。

那兔達が息を飲んでうーちゃんの反応を覗いていると彼女は器用に箸を握り食べ始めあつと言う間に卓上に置かれたおかずを平らげ、啞然とする猿兔の前に茶碗を差し出し何かを訴えかけている。

「……」

「え？…あ、おかわりね…」

那兔は人間以上に人間らしい行動をするうーちゃんを見ている中に本当は喋れるのではないかと疑念を抱き、事の真偽を確かめる為に朝食の後に彼女を連れ近くの映画館へ赴く。

と言うのもそう深い理由は無く唯自分が観たいホラー映画があつたからであり、それを観せれば怖がつて無意識に悲鳴ぐらいは上げるだろうと考えたからだ。

那兔はうーちゃんと一緒に最前列の席に座り、そわそわと開演を待つ。

当然うーちゃんの長い耳は後ろで観る客の迷惑になるので、那兔は彼女の耳の前に畳んでファー帽子を被せおいた。

当の本人は事情を知らない事も相俟って少し怪訝な顔をしながらポップコーンを頬張っている。

「そんな顔しないでよ…僕だって態とやってる訳じゃないんだからさ…」

「…むう…」

ご機嫌斜めのうーちゃんを那兔が必死に宥めているとブザーが鳴った後に場内が真っ暗になり、スクリーンに映像が投影され映画が始まる。

意外にもうーちゃんは動揺せず冷静に映画を静観している。

そして物語の中盤に差し掛かった頃、主人公の女優が振り返ると背後に不気味に笑う幽霊がいるシーンに恐怖した那兔は発狂し気絶した。

それから映画が終幕して場内が明るくなり、瞼の裏に眩しい光を感じた那兔は目を覚ます。

目を開けた視界の先にはうーちゃんが心配そうに彼の顔を覗き込んでおり、自分の置かれた状況を理解した彼は肩を落とし彼女を連れて映画館を出た。

映画館を出た後、何だか帰宅する気にもならず2人は公園のベンチに腰掛けた。

那兔は高がフィクションの物語で気を失った自分を情けなく感じており、しかもそれを愛しのうーちゃんに見られた相乗効果もあり完全に心が折れている。

そんな彼に愛想を尽かしたのか、うーちゃんは真剣な眼差しで何処かへ行ってしまう。

と、思えば数分後には慌てて那兔の元へと駆け寄って来た。

俯く那兔が前を見上げるとうーちゃんは両手にアイスクリームを持って微笑んでおり、彼女は無言でその片方を彼の手に渡す。

実は2人が出掛ける前に猿鬼の計らいでうーちゃんはお小遣いを受け取っていた。

「うーちゃん、これ僕にくれるの…?」

「…はい、うー是那兔さんが落ち込んでると寂しいのです…だからこれ食べて元気になって欲しくて…」

「良かった、やっぱりうーちゃんは喋れたんだね！君の声が聞けて僕凄く嬉しいよ。」

うーちゃんの優しさに那兔は感激して思わず涙ぐむ。

本人曰く、今まで何も語らなかつたのは単に気まずさと恥ずかしさがあったかららしい。

好意に甘え美味そうにアイスクリームの味を堪能している那兔をうーちゃんは羨望の眼差しで見つめ、もじもじと何か言いたそうな顔をしている。

それに気付いた那兎は首を傾げながら自分のアイスクリームをうーちゃんに渡そうとすると、彼女は赤面し耳をぱたぱたと前後に振った。

「あ、ごめん。てつきり欲しいのかなーって思ったんだけど…僕が舐めたアイスなんていらないよね。」

「えっ、そうじゃなくて…うーは那兎さんの…その、抹茶のアイスの味見がし、しししいたいのです！」

「良いよ、でもその代わり…君のチョココメントを僕に味見させてね？」

「これって間接キ　じゃ、じゃあ取替えっこするです！」

2人が互いのアイスクリームを交換しそれぞれ違う味を楽しもうとした矢先、突然草陰から小柄な狐が飛び出しうーちゃんのアイスクリームを啜って逃げて行った。

折角勇気を出して那兎に譲って貰ったのにも関わらず、ほんの一瞬で狐に泥棒され無性に悲しくなっただうーちゃんはまるで赤ん坊の様に泣き喚く。

その泣き声は周囲の通行人に那兎が彼女を泣かせたのではないかと誤解させてしまう程だった。

止むを得ず那兎は自分の、元いうーちゃんのアイスクリームを渋々返してあげると彼女はぴたりと泣き止み潤んだ瞳で彼を見つめる。

「な、那兎さん…もしかしてこれ…うーにくれるのですか？」

「まあもう十分励まして貰ったからね。だから今度は僕が励ます番だよ。」

そう言って那兔はうーちゃんの頭を優しく撫でる。

この瞬間、唯の飼い主に過ぎなかった那兔はうーちゃんにとって今まで以上に特別な存在へと変わった。

勿論那兔も同じ気持ちだった、だが彼は本当に擬人化した兔に対してそんな感情を抱いて良いのか分からず苦悩していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2298z/>

僕のペットが擬人化したら。。。。

2011年12月13日05時04分発行